

行政視察報告書

令和 8 年 7 月 7 日・8 日

西脇市議会
文教民生常任委員会

1 視察実施日及び視察先

- (1) 令和8年7月7日（火） 富山県砺波市役所
- (2) 令和8年7月8日（水） 石川県かほく市役所

2 視察事項

- (1) 学力向上事業について
 - ア 「1時限40分授業」、「心の天気」の概要について（砺波市）
 - イ 朝学習や5教科の小テスト、ICTの効果的活用方法など児童の取組（かほく市）
 - ウ 独自の学力調査の実施、授業改善のための教員の教科研修会、家庭学習や生活習慣の支援方法などの運営体制（かほく市）
- (2) 放課後児童対策事業について
 - 「放課後こども教室」や「土曜学習教室」、「中学校放課後支援教室」における取組と運営体制（砺波市）

3 参加者

文教民生常任委員会

委員長 藤原 秀樹

副委員長 藤原 哲也

委員 巽 泰 吉井 敏恭 林 晴信

教育創造部 萩原 靖久

議会事務局 岡本 将輝

4 砺波市概要

(1) 学力向上の取組

ア となみ授業スタンダードV

- ・自立した学習者を育てるために、砺波市で作成したものであり、子どもと教師が協力して学習してみたいと思える学習課題を考える。

イ 1時限40分授業

- ・となみ授業スタンダードVの授業改善の中での取組で、子供たちの集中力向上や教員の負担軽減につなげる。40分授業で発生した30分の余り時間である「帯タイム」で児童の個別相談の時間にあてたり、児童各々が主体的に学習する時間を作る。令和8年4月から市内全ての小学校で40分授業を開始している。

ウ こころの天気

- ・「こころの天気」による心身の把握のこと。タブレット端末を使用し、朝と午後の1日2回、子どもが気持ちや

体調を入力する。これにより、いじめや不登校の兆候を早期にキャッチし、教師が組織的に迅速な個別対応（帯タイムでの面談など）を行う体制を整えている。

(2) 放課後対策事業

ア 放課後こども教室

・役割と目的

安心・安全な子供の活動拠点を設け、地域住民の参画により、勉強、スポーツ、文化活動及び地域の交流活動を行う。

・対象

小学生が中心

・出町小学校せつぶん教室（出町小学校もくもくタイム）

小学校の空き教室で学習支援を行っており、学童保育で預けられない保護者にとって、子どもを預けやすいことが特徴である。課題として、学校が運営主体となる委託契約となるため、補助金関係事務や報告書作成など教員側の事務的な負担が増えることが挙げられる。

・中野わくわくこども教室

市の補助を経て、開設している教室となっている。活動日は、月曜日の放課後から行っており、夏休みや冬休みは他の曜日も開催している。対象は、小学校4年生から高校生までを受け入れている。

・五鹿屋放課後子ども教室、東野尻放課後子ども教室

地域への行事への参加を促したり、伝統行事の指導等を行っており、この地域に住んでいる子どもたちを対象に行っている。学習支援などは行っておらず、活動も不定期となっている。

・たかの子のびのび教室

出町小学校せつぶん教室と同じような実施内容となっているが、小学校2年生に英語に触れているというところが特徴的な教室となっている。

・雄神子ども塾

小学校3年生から6年生が対象となっており、主に大学生がスタッフとして運営がされている。地区の大学生がいなくなり、運営が難しくなったことがあったが、他地区の大学生に来てもらうことができ、今年度も運営されることになった。

イ 土曜学習教室

・役割と目的

地域や企業の人材を活用し、休日ならではの体験活動を行っている。

- ・対象

小中学生が中心

- ・庄川土曜教室

砺波市唯一の土曜日教室となっており、茶道や囲碁将棋を活動内容としている。現在も活動が行われており、スタッフも確保できているが、来てくれる子どもが少ないため、運営状況は厳しい。

ウ 中学校放課後学習支援教室

- ・役割と目的

放課後や週末等に学校の空き教室等を活用し、大学生や教員ＯＢなど地域住民の指導で学習支援を実施する。

- ・対象

中学生が中心

- ・般中応援自習室

学習塾が般中地区に少なく、地区の教員ＯＢや大学生が指導をして、学習支援を補う取組であり、宿題のサポートなどを行っている。

5 かほく市概要

(1) かほく市独自の学力調査について

ア 学力調査の概要

全国学力調査では、小学校６年生、中学校３年生を対象に実施されているが、かほく市では、小学校４、５年生、中学校１、２年生も追加対象として学力調査を実施している。東京書籍株式会社の標準学力調査と児童の自己肯定感やクラスの雰囲気を調査する「i-check」を年に２回取り組んでいる。学力調査と学級経営の両面を見て、普段の指導が適切に行われているのか検証できる体制を整えている。

イ 学力調査の分析、改善策

国、県、市で実施した全ての教科において、学校独自で分析したものを教育委員会に提出してもらっている。課題改善策は、教師の指導面から原因を追究したり、検証問題を用意して、児童に回答してもらう。検証問題は、全国学力調査の問題の過去問を採用し、内容は、記述式がほとんどである。正答率を見ながら、授業改善が有効であったかどうかを確認する。

ウ 授業改善の取組

かほく市では、「教科の見方考え方に基づく「個別最適な学

び」と「協調的な学び」の一体的な充実」を重点目標として掲げている。重点目標を達成するための一環として、かほく市内の小中学校 9 校の中から 1 校を研究推進校に指定し、研究発表会を実施している。

推進校以外の学校でも、年に 2 回各学校の取組を報告する連絡協議会を実施しており、各学校の前で取組の成果、反省を行っている。

また、教科研修会や各学校における I C T を活用した好事例を情報共有する G I G A スクール対応研修会もそれぞれ年に 1 回実施している。

所 感

藤原 秀樹

今回の視察の第一日目は、富山県砺波市において、学力向上の取組と放課後児童対策事業について学びました。40 分授業で生み出された 30 分間を、心と身体の不調などを把握する「心の天気」や、授業で分からなかったことの確認、振り返り、予習などに活用することで、自ら学ぶ習慣が身に付き、集中力の向上にもつながることを学びました。

また、これらの取組を市民の皆様に伝えるとともに、教育長の強力なリーダーシップの下、明確な考え方や方向性を示し、しっかりとした教育が行われていることに驚きました。

「心の天気」は、タブレットによる心の健康観察を、朝の登校時と午後の帯タイムに行うものです。心の変化や心身の不調などをいち早く把握し、対応することができるため、とても良い取組であり、西脇市でも導入できればよいと思いました。

放課後子ども教室などの学習支援では、小学校 1・2 年生を対象に、月曜日から金曜日まで空き教室を利用した自主学習支援が行われています。また、各公民館などでも自主学習支援が行われており、地域全体で子どもたちを育てる体制が整っていると感じました。西脇市でも、コミュニティ・スクールや自治協議会などにおいて、このような取組ができればよいと思いました。

二日目は、石川県かほく市において、学力向上の取組について学びました。かほく市では、教育費を充実させ、I C T 支援員だけでも 12 人を配置するなど、支援体制が充実していました。また、学力調査についても、小学校 4 年生から中学校 3 年生まで毎年実施し、国や県が行わない年には、市独自の学力調査を行っています。学力と学級

経営の両面から分析・改善を行い、取組をしっかりとしたサイクルで進めていることが印象的でした。教育委員会、学校長、教員が一体となって取り組んでおり、西脇市でもこのような取組を行う必要があると感じました。

各学校では、朝学習、朝読書、朝小テストなどを毎朝 10 分から 15 分程度行っています。また、自主学習ノートに自分の課題を書いたり、授業の振り返りを自分自身の学びとして行ったりするなど、保護者の協力のもとで取り組まれていることを学びました。

2 日間を通して感じたことは、「頑張ります」という気持ちだけではなく、しっかりとしたトップの考え方や、予算、仕組みなどを考え、市、教育委員会、学校、保護者、地域などが協力して取り組まなければ、学力の向上にはつながらないということです。今回の行政視察で学んだことを生かし、これから文教民生常任委員会でしっかりと議論を重ね、西脇市の学力向上に向けて取り組んでいきたいと思います。

藤原 哲也

本視察で確認した富山県砺波市の取組みは、各施策が緊密に連動して相乗効果を生み出している点で、本市へ示唆するものである。授業時間を 45 分から 40 分に短縮し、5 時間目を午前中に実施することで児童の集中力を高めるとともに、そこで生み出した時間を「帯タイム」として、個別最適な学習支援や心理面談の時間に充て、合理的に機能させていた。特にタブレットを活用した健康観察システム「心の天気」は、児童の心理的变化を 1 日 2 回リアルタイムで教職員が確認でき、変化を検知した当日のうちに即時面談へ繋げることで、不登校やいじめの未然防止に大きな成果を上げている。また、「地域の子供は地域で育てる」という理念のもと、元教員や住民、大学生らが参画する放課後子ども教室の取組では、小中学生を対象にした自主学習支援を行うなど、地域一体となった手厚い児童支援体制を確立していた。本市においても、すでに一人 1 台端末のインフラが整備されている。この ICT を最大限に活かし、まずは「心の天気」のようなデジタルによる健康観察システムを導入すべきである。児童の細かな心理的变化を確実にキャッチし、迅速なアプローチへ繋げる仕組みは、本市のいじめ・不登校対策の強固な「早期発見の仕組み」となる。砺波市の教育課程の見直しや地域連携の手法も視野に入れつつ、まずは ICT を活用した心のケアと早期対応体制の確立に向け、具体的な導入検討を迅速に進めるべきである。あわせて、本市の放課後子ども教室開催事業においても、各拠点となる地域での自主学習支援に精力的に取り組むべきである。

かほく市の教育施策には、強力な財政支援、データに基づく分析、

そして家庭との連携が三位一体となった、非常に先進的かつ強固なシステムが構築されています。

まず基盤にあるのは、一般会計から県内トップクラスの予算を投じた手厚い人的体制です。ICT支援員や、不登校の児童生徒を支えるSSR（スペシャルサポートルーム）支援員を各校に配置し、教育現場を強力に支えています。また、市独自の取り組みとして、小学5年生と中学1・2年生を対象とした学力調査や「i-check」による客観的な「見える化」を行い、各学期の検証を通して確実な指導改善を徹底しています。ICT端末も単なる道具ではなく、個別最適な学びと協働的な学びを深める「対話のツール」として有効活用されています。特筆すべきは、家庭学習の習慣化を各家庭の意識だけに委ねず、学校が各期に「強化週間」という明確な枠組みを設けて組織的に伴走している点です。予算確保から不登校支援、データ活用、そして家庭連携に至るまで、すべてが「子ども一人ひとりを大切にする」という目的のために見事に連動しています。地域全体で子どもを孤立させず、学力を底上げしようとする強い教育意志と、実効性の高さを強く感じる優れたモデルであると評価できます。

本市におきましても、こうしたデータや明確な枠組みを活用した、より伴走的な学習支援策を取り入れるべきと考えます。

巽 泰

今回の行政視察では、富山県砺波市及び石川県かほく市において、学力向上施策と放課後子ども教室について学ぶことができた。

砺波市では、ICTを教育現場で積極的に活用し、授業だけでなく家庭学習や教職員間の情報共有まで一体的に運用している点が印象的であった。ICTを導入すること自体を目的とするのではなく、子どもたち一人ひとりの学びを深めるための手段として活用し、学校と家庭をつなぐ学習環境を構築していることが理解できた。

かほく市では、市独自の学力調査を小学校4年生から中学校3年生まで継続して実施し、国・県の学力調査と組み合わせることで、切れ目なく児童生徒の学力を把握していた。調査結果を授業改善や個々の学習支援へ反映するとともに、家庭学習の習慣化につなげることで、学校と家庭が連携して学力向上に取り組む仕組みが構築されていた点は非常に参考になった。また、質疑応答ではSSR（スペシャルサポートルーム）による不登校支援についても説明を受け、多様な学びの場を確保することの重要性を改めて認識した。

さらに、両市とも放課後子ども教室を地域住民やボランティアと連携しながら運営しており、子どもたちの安全な居場所づくりだけでなく、体験活動や地域との交流を通じて豊かな学びの機会を提供していたこ

とも印象に残った。

今回の視察を通じて、学力向上には継続的な学習状況の把握と分析に加え、学校・家庭・地域がそれぞれの役割を果たしながら子どもを支えることが重要であると再認識した。特に、家庭学習は学校だけでは補えない学びを支える重要な要素であり、保護者と学校が共通の目標を持ち、子どもたちの学習習慣を育む環境づくりが必要であると感じた。

西脇市においても、ＩＣＴの効果的な活用や家庭学習の充実、地域と連携した放課後活動の推進など、今回学んだ取組を本市の実情に合わせて取り入れ、子どもたち一人ひとりの可能性を最大限に引き出せる教育環境の充実に向けて、今後の委員会活動や政策提言に活かしていきたい。

吉井 敏恭

富山県砺波市では、教育長より「文部科学省が進めるＧＩＧＡ構想により整備された１人１台端末の効果の最大化を図っている」との挨拶がありました。ＧＩＧＡ構想の進展を支え、すべての児童生徒に対し個別最適化された学びと協働的な学びの実現を目指すとのこと。

ＩＣＴを活用した教育を実現するために教員の資質・能力を高める研修活動を充実させ、指導力向上に努めている。当初は、ＩＣＴの活用に消極的な考えの教員に対しては教育長の強力なリーダーシップが発揮されたとのこと。

本年度４月から１時限が４５分から「４０分授業」へと変更され、「授業の最後まで集中して学習に向う子供が増えた」と集中力向上の効果が確認されている。５分短縮することで生まれた時間は、アップデートタイム（帯タイム）の新設、タブレットによる心の健康観察の実施、自己選択学習の創出に利用されている。

心の健康観察は、朝の登校時と昼休み後のアップデートタイムを利用してタブレットに「こころの天気」を入力するもので、「今はどんな気持ちですか？」、「体の調子はどうですか？」、「何かいいたいことは？」等の問いに答えるもので、担任一人で抱え込まず、学年主任や管理職が共有・対応するルールが整っており、いじめや不登校の兆候をいち早くキャッチできるので迅速な対応につながっている。

多様な児童生徒に個別最適化された、資質・能力を一層確実に育成できるＩＣＴ環境を実現する様々な取組を学びました。

「ＩＣＴを活用した教育」のメリットを全面に押し出した砺波市の方針は、５月１９日に視察の小野市とは対照的でありましたが、対照的であるにも関わらず、両市とも教育長の高い統率力に支えられた発言に納得させられました。

石川県かほく市では、基本理念「自から考え ともに学び 明日をひらく人づくり」の具現化に向けて様々な施策が展開されています。

令和８年度当初予算の一般会計208億円に占める教育費は16%の33億8千万円であります。この教育費により、前日の砺波市の教育長のおっしゃった「かほく市は学力向上の取組では有名なところ」のとおり、次の取組がなされている。

- ・国や県が実施する学力や学習状況に関する調査に加え、市独自の学力テスト（小学５年＝国・算／中学１・２年＝５教科）を実施している。
- ・東京書籍の総合質問紙調査「i - c h e c k（アイ・チェック）」を全小中学校に導入し独自の学力調査とクロス集計を行っている。
- ・小中学校９校全てに学校司書が配置され、学校支援員の配置も充実している。

私は事前に、かほく市教育委員会が作成しホームページに公開されていた「全国学力・学習状況調査結果の概要」を拝見し、その見やすさ分かり易さに着目していました。この概要は２人いる指導主事が中心となり作成されたものとのことで、「かほく市と県全体を比較すると」欄の記載が興味深く、令和６年度では

- 学校が楽しいと思い、授業で課題解決に向けて取り組んでいる生徒が多い。
- 規範意識が高く、いじめはどんな理由があってもいけないことだと答える児童生徒が多い。
- △ 小学校では、国語、算数の勉強が好きと答えた児童はやや少ない。
- △ 家庭の蔵書量が一定以上あると答えた児童生徒はやや少ない。

などの傾向についての記述がありました。

残念ながら石川県の対応に順じ「令和７年度」より概要の作成を中止しているとのことで、残念でなりません。

しかし、学力と学級経営の両方からの分析や改善策の検討が現在も十分に行われており、具体的な数値目標に対しＰＤＣＡサイクルによる進行管理が確立されています。

「授業改善の取り組み」として毎年１校（中学３校、小学６校の９校の中から）を研究推進校に指定しての研究発表会が実施されています。（予算は年間20万円を研究推進校に）

また、自主学習や家庭学習の柱となる「自学ノート」の取組をしており、子どもの自主学習を、その保護者が採点する等の例も報告され

た。

かほく市は、日本の哲学者 西田幾多郎の生誕地で、かほく市が管理運営する日本で唯一の哲学の博物館、西田幾多郎記念哲学館が存している。かほく市において市民が学術・文化に触れる多様な事業を展開されている。西田幾多郎の著作を読む読書会や哲学講座等により市民の教育に関する意識が高いのではないかと思われた。

学力向上の取組においては、教育費の増額による教育環境の充実が必要である。

林 晴信

■ 富山県砺波市

砺波市への視察は名目こそ「放課後子ども教室事業」だったが、意図としては「学力向上の一環」だった。もちろん、その意図は砺波市教育委員会にも伝わっていて、主に学力向上を主体とした放課後子ども教室のあり方のような説明をしていただいた。

また教育長直々に私たちの視察対応いただき、その熱い思いとリーダーシップに感服した。

デジタルかアナログか問題なんて、今どき I C T を使わないなんてケシカラン！と一喝で、先の小野市への視察の時とは違う感じが印象的だった。砺波市では小学低学年からでも生成 A I を使った学習にも取り組んでいる。I C T 教育は西脇市を遥かに凌駕するような教育長の熱の入れようだったが、リーディング D X 校にも生成 A I パイロット校にもなっていないようだ。

市全体の教育全般について教育委員会が各学校を引っ張っている感じを受けた。

放課後子ども教室事業は各地区（22 地区ある）公民館と連携した取組や学校で支援員が行う取組と様々だったが、学習支援には元教員が積極的関わってくれている様子が伺えた。中野わくわく教室という小 4 ～中 3 ままでが対象で、自主学習支援などを行っている教室では全てボランティアの活動だと聞いた。

なぜ、元教員のみなさんが積極的に関わってくれるのですか？

と尋ねると、「地域の子どもは地域で育てる」の意識も強く、地域に帰った元教員が自分のスキルを活かして子どもたちに積極的に関わる意識が強いのだろうとの言葉に感銘を受けた。恐らくそのような文化が根付いているのだろうと察する。

西脇市では放課後子ども教室事業での学習支援の取組はなく、それがあれば直ちに学力向上に繋がるとも思わないが、設置する努力はあっていいのではないかと考える。

「自主学習支援」という名目であれば、何も支援員を教員免許所有

者に限定しなくてもできるのではないかと思う。

地域で育てる意識の高さが、学力向上の一助を担っているように感じた。

「土曜学習」「中学校放課後学習支援」などの取組は、西脇市でもみらいえで一部行っているが、もう少し他地区にも広げられないものかと思う。

■石川県かほく市

前述の砺波市の教育長が「かほく市の学力向上の取組は凄いですよ」と仰ったので、期待して視察に臨んだ。

かほく市で感じたことは、サイクルがキチッと回っていること。

教職員の教え方も常に検証や好事例の振り返りと実践を絶えず行っているように感じた。また児童生徒たちも、小6と中3の全国学力テストだけでなく、県と市で小4以上は毎年統一の学力テストを行い、その結果の分析とウィークポイントの克服に時間も割き、全体の底上げをはかっているようにうかがった。

考えてみれば、全国学力テストの記述式なんて、小6でいきなりさせられても対応に戸惑う児童もいるだろうし、ある程度の慣れも必要なんだろうなと考える。かほく市では、東京書籍による学力テストだったが、西脇市も導入を検討しても良いのではないかと思う。

ただ残念だったのは、石川県自体が学校学力状況調査の結果公表を取りやめたのに合わせ、かほく市も外からは見えないようになってしまった。

令和6年度までは学校単位でも公表していた

<https://cms.ishikawa-c.ed.jp/unokee/file/7381>

以前のように学校内ではその調査結果を踏まえ、児童生徒と個人面談を行い、学級担任だけではなく、職員全員で調査結果を共有しているという取組は継続だとは思いますが、外部からは可視化できないのが（視察に行く側としては）残念といえる。

かほく市は砺波市とは違って、教育委員会主導とはいえ、学校の意思で自ら行うというスタイル。こと教育においては、集権型の砺波市と分権型のかほく市といえるような、それぞれに違った良さも垣間見えた。小野市と砺波市だけを見ていたら、西脇市も教育委員会がしっかりと分析と方針をたて主導すべし！と書いたかもしれないが。ただ、分権型（と感じる）西脇市の学力が一向に向上しないことを鑑みれば、集権型へのシフトもいいのかもわからない。同行した教育部長の意見も是非聞いてみたいものだ。

そもそも、かほく市はかの西田幾多郎（哲学者）の生誕地ということもあり、市民を対象とした「哲学カフェ」を毎月開催したり、小学

校に哲学の出前カフェを開催したりしている。つまり普段から「考える」ことがかなり身近にあるんじゃないかなろうかとも思う。

カントの言葉に「人は哲学を学ぶことはできない。ただ哲学することを学ぶだけである」というのがある。そんな土壌も影響しているのではないかと、西田幾多郎記念館（設計は安藤忠雄氏）の中で考えた。

砺波市、かほく市の両市を視察して思うことは、やっぱり最低限PDCAサイクルはきちんと回すことだと思う。家庭学習の少なさは両市の視察だけでは解決策は充分に見いだせなかったが、放課後子ども教室や土曜学習で少しでも増やす工夫はできる。かほく市にあった「自学ノート」のようなものが、西脇市でどの程度機能しているかはわからないが、保護者が少しでも関わる機会を増やすことも大事だろう。そして、テスト自体にも慣れてもらうような取組があれば、低迷から抜け出せるのではないだろうかと思う。